

横地光明著

## 『自衛隊創設の苦悩』

その真相と宿痾』読後所見

高井 三郎 陸自58

本書の著者は終戦時に陸軍航空士官学校の60期生の課程を終わり、教員養成所を経て進学校の春日部高校の教師を勤めていたが旧軍先輩の呼び掛けに応え、新国軍建設のため警察予備隊の初級幹部として入隊した。

事後、中隊長、連隊長、師団長、そして方面総監と各級指揮官を歴任した。また陸上幕僚監部で人的物的戦力の充実と所要の予算確保のため防衛庁、大蔵省当局との難しい折衝に当たると編成班長、装備部長の要職も勤めている。

それに加え幹部学校教官、富士学校長として後輩幹部の育成にも尽力し、

米軍の指揮幕僚大学で現代戦の戦略戦術も学習した。このような来歴の著者なるが故に新国軍の建設から陸自の創設、それに政治による防衛力育成の足取りと基本的な問題点を具体的に描くことができた。

本書は敗戦による旧帝国陸海軍の解散、史上初の外国軍隊による国土の占領、占領軍当局による軍備を禁止する憲法の制定、その僅か5年後の占領軍当局による再軍備の要求と警察予備隊の創設、新国軍の基礎になる保安隊、自衛隊への改編過程などを記している。著者は同じ敗戦国ドイツが当初から旧軍人主導の再軍備を始めたので軍事の原理原則が活かされて来たが、日本では当初、旧軍人を嫌い、旧内務省(警察)出身の警察主導の態勢で再軍備を手掛けたが不首尾に終わり、旧軍人の助けを借りて漸く軍隊が体を成すようになったと記述する。

ところがその後も中央では制服が国民の支配を受ける態勢が続き、軍事戦略は脅威を破砕して国家国民の安全を確保すると言う軍事の原理原則でなく、警察比例の原則によつており、現にPKOでも現場の部隊が随意に火器を使えず苦しんでいるという事である。

また自衛官は軍人としての名誉も権限も処遇も与えられず、若い人達の間で自衛隊よりも厚遇を期待できる警察に行く傾向も否めない。

著者は政治家始め国民に対し、国防の実情を訴える事の必要性を認識して自主的発意により戦後73年の防衛政策史、自衛隊史を著した。然るに、このたぐいの現代軍事史は国防の中樞部が著して広く国民に伝えるべきものである。いみじくも米国防総省では米陸軍戦史部(USCMH)を通じて、AMERICAN MILITARY HISTORYを著し、米国民はもとより、外国人も取得閲覧ができる態勢を採っている。

これに対し、我が国では国立公文書館の対官庁政策に基づき、防衛庁長官官房・文書課主幹(戦史部でない)で著した『防衛庁50年史』は国会図書館所蔵になり、若い研究者達が輕易に接するのが容易でない。また『航空自衛隊50年史』、『海上自衛隊50年史』(いずれも空幕、海幕発行)も御得意様への進呈専用で市販御法度である。

なお、陸自は50年史を出していない。このような国民への広報軽視の閉鎖的な国防政策に危機感を抱いた著者は、本来、公的機関がやるべき事業を自らの時間、労力、経費を投じて実現した。したがって著者は国家から表彰されるに値すると思う。本書は固い話だけでなく、いずれも東京進駐の第一陣、米陸軍第1騎兵師団史、第720憲兵大隊史からの珍しい写真も載っている。若し人たちの関心と興味を誘う事は必定である。